

上映映画解説

1955, 9 ~ 10

国立近代美術館 フィルムライブラリー

No. 39

Der Kampf ums Matterhorn

「マッターホーン」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、内外古今の優秀映画の収集保存とその活用に努めており、その事業の一部として、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画を鑑賞し研究する会を開いていますが、今回は特別鑑賞会第一七回として、ドイツのサイレント映画「マッターホーン」をとりあげ、一〇月五日まで毎週二回(日・水曜日の二時)上映します。

「マッターホーン」は、名著「アルプスの峰を攀ちて」で有名なイギリスのホインパーらに参加して行われた一八六五年のマッターホーン初登攀競争の劇的な事実譚に取材し、サイレント末期の一九二八年にドイツのホーム映画で作られたもので、日本では昭和四(一九二九)年五月二二日に、丸の内邦楽座と浅草松竹座(二三日)で封切されました。

マッターホーン

無声九巻

ドイツ・ホーム社一九二八年度作品

—— スタッフ ——

脚色……………アーノルド・フランク
監督……………マリオ・ボンナルド

撮影……………ゼップ・アルゲイヤ
……………ウイリー・ウインタースタイン

装置……………ハインリッヒ・リヒター
……………キャスト

アントン・カレル(山案内者)……………ルイズ・トレンカー
その妻フェリシタス……………マルチェラ・アルベニ
クロツツ(山案内者)……………ハンネス・シュナイダー
ギアコモ(アントンの弟)……………クリフォード・マクラン
エドワード・ホインパー(英国登山家)

Der Kampf ums Matterhorn

Anton Carrel

Louis Trenker

Felicitas, his wife Marcella Albani
Giacomo, his brother Clifford Mac Laglen
Edward Wymper Peter Voss
Croz, a mountain-guide Hannes Schneider
Directed by Mario Bonnard
and Nunzio Malasomma

この映画の主な興味は、登攀のプロセスとその劇的な事件にあります。その内容を封切当時のキネマ旬報(一九二九年五月二二日)から引用します。

略筋——雲界高く、雪と氷とに閉ざされた神祕の国、その頂に聳え立つアルプスの盟主マッターホーンの雄姿は古来幾世紀の間、下界に住む人々の敬崇の祠であり、精神的な鼓舞の源であり、而してまた全世界登山家の憧憬の的でもあった。世界的に山案内者としてその名の高いアントン・カレルもまたこの頂征服の喜びを夢見る男であった。彼は美しく優しい妻フェリシタスと共にこの処女峰征服の第一人者たる事を信じて疑はなかった。が彼の腹達の弟ギアコモがフェリシタスに横恋慕してゐるとは知らなかった。その内にこの地へ若く果敢な英国の登山家エドワード・ホインパーがマッターホーン登攀の拳をアントンと共にしに來たが、アントンが何故かこれに承諾を与へなかつたので、ホインパーは他の山案内者と共に単独この登攀を決行した。併しこの計画は失敗に帰し、一行は谷に滑り落ちて負傷した。傷ついたホインパーはアントンの家に運ばれ、フェリシタスの手厚い介抱を受けた。この機を逸せずギアコモがフェリシタスとホインパーとの間に不純なものがあるとしてアントンをそそのかしたので単純なアントンは怒りに馳られ、突如ホインパーに登攀する承諾を与へた。登山の途、アントンはホインパーを断崖から突き落して恨みをはらさうとしたが、心にとがめてホインパーを助けた。山の悲劇を伝へ聞いたフェリシタスはとるものも取りあへず夫とホインパーとの跡を追って危険を未然に防がうとした。フェリシタスは転落した。アントンは妻を救ひ、己れの単純

な嫉妬から惹起したこの事件を悔ひた。二人の心は美しく澄んで晴れた。それから幾年かは過ぎた。ホインパーは処女峰征服の希望を捨てることが出来ず、再び友人達と共にやってくる。アントンも彼に遅れず、伊太利人の仲間と共にこの栄冠を争ふことになった。この決死の競争は終に英人の勝利に終った。マッターホーンの絶頂には有史以来最初の英国旗が飄った。併し、山の神祕は傷しい復讐を行ふのである。下山の途、ホインパーの三人の友と一人の案内者とは一条の綱によって懸崖にぶらさがつた。ホインパー一人の力がどうしてこれを支へる事が出来やう。綱は切れた。悲劇は來た。が、ホインパーは奇蹟的にその一命を取止める事が出来た。そしてホインパーが人々から友を見捨てたとして誹られた時に、アントンは自ら進んで友の為にその潔白を証したのであった。(一立商店輸入)

マッターホルンの初登攀

黒田正夫

アルプスといえばスキスの山に限られてゐる感がある。ヨーロッパ最高の山は伊伊国境のモン・ブラン(白山、四八一〇米)であるが、スキス・アルプス最高のもはマッターホルン(四四七八米)である。イタリヤの中央山塊グラン・パラディから北望すれば、イタリヤの国境に西からモン・ブラン、マッターホルンと続き、東にモンテ・ローザと三山が並んで見える。モン・ブランは最高であり、エイギュー(岩峰)の群はすばらしいが、その頂上だけはのっぺりして、棉帽子をかぶつたように雪に覆われ、白山の名にふさわしい。モンテ・ローザ(バラの山)は日本の大蓮華岳(白馬岳)のように、バラの花のような山容をもっている。その間に立つマッターホルンは丁度槍ヶ岳のように一塊の岩峰として聳えている。

去年の秋、僕はモン・ブランとマッターホルンをイタ

リヤ側から訪ねたが、マッタホルンの麓の根拠地ブルイユに夜まっ暗になって着いた。夜が明けて宿の窓から一寸顔を出したら、鼻をなでられるように、まん前に岩峰が聳えている。マッタホルンらしいとは思ったが、余りに近いので疑いが、宿の者にきいたら、やっぱり、そうだと聞いた。

この岩峰は屏風のようにぐるりとブルイユを囲んだ岩壁の上に、一つだけ、そそり立っていて、その左肩から氷河がブルイユに向け落ちていく。左の肩からは氷河の礫石で埋まっている丘陵をぐるりとめぐって東の方にフルガンの岩壁は続く。その終ったところに、スキスのツェルマットの部落にゆくテオドルの峠があり、その東の頭をプラト・ローザという。

この映画は、ブルイユの谷で起った、ウインパリーのマッタホルン初登攀（スキスのツェルマット側から、一八六五年七月）にからまる物語である。今でこそ、ブルイユからフルガンとプラト・ローザとは標高差千五百米に及ぶ空中索道がかかっており、ブルイユまではアスファルト道路をミラノから、三、四時間でバスでもドライブでも飛ばすことが出来るが、この映画を見る人は、そんなことは忘れて、百年ばかり前、黒船騒ぎや御維新の時代にかえらなくてはならない。

あのチョンまげ時代は、イギリスでも男がウエーブのついたかつらをかぶった時代から余りぬけ出ていない頃である。（映画ではロンドンの場面がかぶっている。）概して、このイタリヤの田舎には都会人なんか疎に訪れやしない。イギリス人がひょっこりやって来て神聖の象徴位にしか思っていないかったマッタホルンに登ろうといひ出したのだから、日本でいえば役の行者か弘法様の再乗位に驚いたことだろう。

それにしても、映画は物語を現代化している。その頃、登綱（ザイル）や今のようなピッケルや、ましてトリコニの鋏なんてありはしなかったろう。又、今のブルイユは豪華な赤倉や志賀高原の観光ホテルより立派なホテルだけで、木造の村人の宿として残っているのは、時候はづれだったので一つあいてたエーデル・

ワイスという僕がとめてもらった宿位のものであろう。この物語の頃は、ウインパリーがイタリヤ側ではとうとう協力を得ず、とほとほとスキス側のツェルマットに越えてゆく、テオドルの峠を通う田舎の旅人の宿よりなかつたであろう。ブルイユの村も、日本でいえば秩父の奥の八里八丁人を見ずといった十文字峠の登口にある栃本の部落といったところであろう。

そんな世の中であつたから、外国人なんか先にマッタホルンに登らしたら罰があたると土地のイタリヤ人はさぞ騒いだことであろう。それで初登攀は村人の中に国際的の感情をまきおこし、色々の感情のもつれが起つた。

それで、単調なるべき登山映画に劇的なストーリーを組み入れることが出来たのである。更に案内人の家の内いざこざ——兄嫁をねらつて兄貴を山にやつて死なせようとする弟の悪だくみを取入れて、美しいイタリヤ美人と男との単調を破っている。

こんなことより、岩攀りの技術のスリルを味わせようとするのが、この映画のねらいであろう。確かに、美しい氷河や岩峯の景色と共に、岩の技術というか、スリルは見ごたえがある。うるさい山登りの連中にいわせれば、綱さばきがどうの、バランスがどうの、というかも知れないが、これは岩のテクニストとして見るべきではないから、そんなことにはこだわらないで、楽しく味つたらい。どうせ、昔の技術を現代化して見せようというものだ。そこがドイツ人の範疇（カテゴリ）的なくせだ。そして、これが今春、死んだスキ一の名人ハンネス・シュナイダーの若かりし時（一八二八年）丁度白井のカーン博士に相当するフランク博士に指導されながら、一役（最後のリーダーの案内）を買っている点なぞ、古い山の人たちには懐かしく、あの有名なスキー映画の最初の傑作「兎狩」の姉妹篇として見れば、古典映画の観賞として充分価値のあるものであろう。